2012 年度　文化庁委託事業
東日本大震災において危機的状況が危惧される
方言の実態に関する調査研究事業(福島県)

山木屋のことば

2013 年 3 月

菅野理恵
(元　山木屋中学校教諭)

半沢　康　監修

はじめに

私たちが，地域の方言を教えていただきに山木屋地区へうかがったのは，2010 年の夏のことでした。当時山木屋中に勤めていた菅野（旧姓 遠藤）理恵先生が，福島大学の大学院へ研修で派遣されたことがきっかけとなり，その修士論文作成の研究を兼ねてうかがったものです。お盆明けの暑い時期でしたが，福島市とは違って大変涼しく，阿武隈高原の爽やかな気候を満喫しました。

冬は逆に厳しい気候を活用した田んぼのスケートリンクが有名ですね。地域の若い人たちがまとまって取り組んでいる山木屋太鼓は全国大会にも参加するほどの腕前とのこと。人々が一体となってさまざまな地域の活動に取り組んでいる様子が感じられ，理想的な地域社会を形成していることに大変感心しました。

おうかがいした際には，おおよそ 100 名の皆様から方言をうかがうことができました。山木屋地区の人口が約 1,200 名ということですから，地域の方々の約 1 割の方とお目にかかってお話をうかがったことになります。現在，方言研究に協力してくださる方を探すのはなかなか骨が折れるのですが，山木屋地区では改善センターの皆様，公民館長さん，副館長さんおよび各地区の区長さんを通じて大変スムーズに協力をいただくことができました。当時さまざまにご尽力いただいた皆様には，あらためて厚く御礼を申し上げます。

本冊子は，その際教えていただいた結果をもとに，菅野先生がまとめ，福島大学へ提出した修士論文の一部をダイジェストしたものです。個々の結果を見て感じるのは，山木屋地区では中学生や高校生と言った若い世代の人たちの間にも比較的方言が根付いていると言うことです。他の地域で調査を行うと，1990 年代生まれの中高生では，方言はほとんど消えているという結果が多いのですが，山木屋ではこの世代でも使用率の高い方言がいくつも見られました。地域の方々が，山木屋という土地に根付き，方言を含めた地域の営み・文化をしっかりと受け継いでこられたことがよく分かる結果ではないかと思います。

私たちがおうかがいした半年後に，よもやあのような災害が起ころうとは思いもよらず，震災報道で山木屋の様子が報道されるたびに，山木屋の皆様のご苦労，無念さはいかばかりかと胸が締め付けられ，またやるせなさに地団太を踏んでおります。

復興は遅々として進まず，まだ大変な日々が続くかと存じますが，一刻も早くもとの美しい山木屋地区が戻ってくることを，山木屋の皆様からの温かいご親切を賜った者として切にお祈り申し上げます。

2013 年 3 月 20 日

福島大学人間発達文化学類・教授
半　沢　　康

山木屋地区方言研究の概要

川俣町山木屋地区は図に示すように，阿武隈高地の一角をなす，山間地域の集落です。

山木屋中学校での 3 年間の勤務の中で山木屋地区独自の方言形の存在に気づき，大変興味をひかれていました。それは，山木屋が福島市をはじめとした近隣の中心市街地からはかなり離れており，かつては交通網の整備が不十分であったため他地域に住む人々との交流が容易ではなかったということが原因として考えられます。また山木屋地区は相馬郡飯舘村，双葉郡浪江町，二本松市東和町の 3 市町村とも隣接しています。このことから山木屋地区は様々な地域の方言の影響を受けていることも予想されます。

2010 年 8 月 19 日から 22 日，9 月 4 日と 9 月 30 日から 10 月 4 日までの計 10 日間，川俣町山木屋地区を対象とした多人数方言調査を実施しました。調査に協力していただく方の条件は，15 歳までの言語形成期を山木屋地区で過ごしていることとし，これらの条件を満たした男女 94 名の協力を得ることができました。協力くださった方々の人数は以下の通りです。

調査に協力くださった方々の人選および調査会場の提供等については川俣町役場山木屋出張所と山木屋中学校より多大なお力添えをいただきました。また，山木屋地区自治会の各行政区長の皆様にもさまざまにご尽力をいただきました。いずれもあらためて深く感謝を申し上げる次第です。

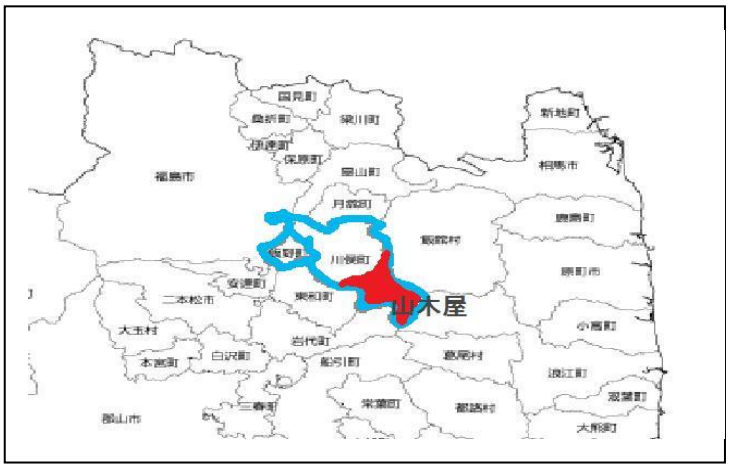


図 1 山木屋地区の位置

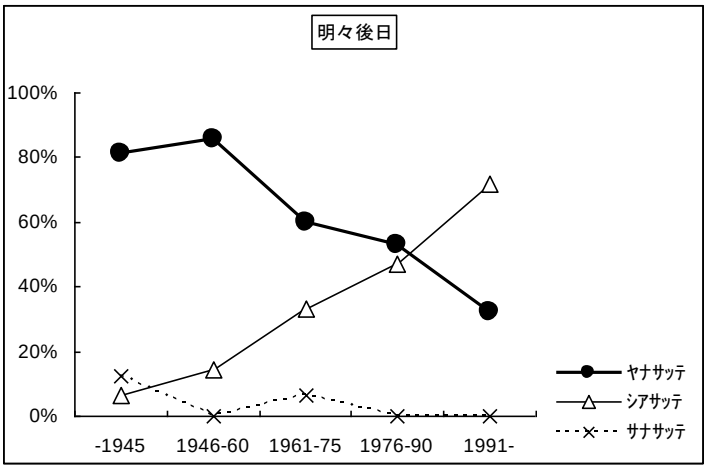
表 1 山木屋調査の調査協力者数

生年	女性	男性	計
-1945年	7	9	16
1946-1960年	11	10	21
1961-1975年	7	8	15
1976-1990年	7	10	17
1991年-	15	10	25
合計	47	47	94

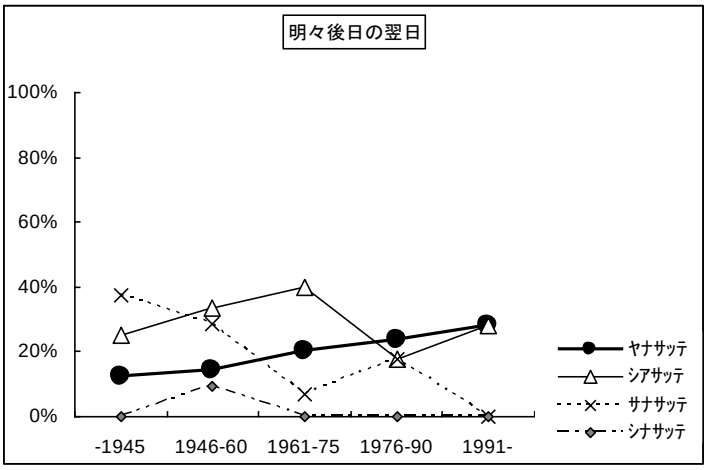
山木屋地区方言研究の結果と考察

119.明々後日 3
120.明々後日の翌日 3
103.おなもみ 4
101.かなへび 5
116.よそう 6
117.嗅ぐ 7
111.怠け者 8
123.インガミル 9
134.ウルケル 10
129.マカシー・カタシー 11
130.ｺｯﾂｧｶﾈ･ｺｯﾂｧｸﾈ 12
131.デカサネ 13
132.メッコメシ・ネッコメシ 14
201.見よう 15
202.飲もう 15
203.言っただろう 16
206.いいだろう 17
205.そうだろう 18
204.寒かっただろう 19
207.けれども 20
210.知らない 21
223.ハー 22
233.ﾉﾏｻﾝｼｮ･ﾉﾏﾝｼｮ･ﾉﾏｯｾ 23
234.シッサンナ 25
235.シランナ 25

119.明々後日，120.明々後日の翌日　日付の言い方です。今日，明日，あさって。ではその次の日の言い方はどうですか？さらにその次の日はどうでしょうか？

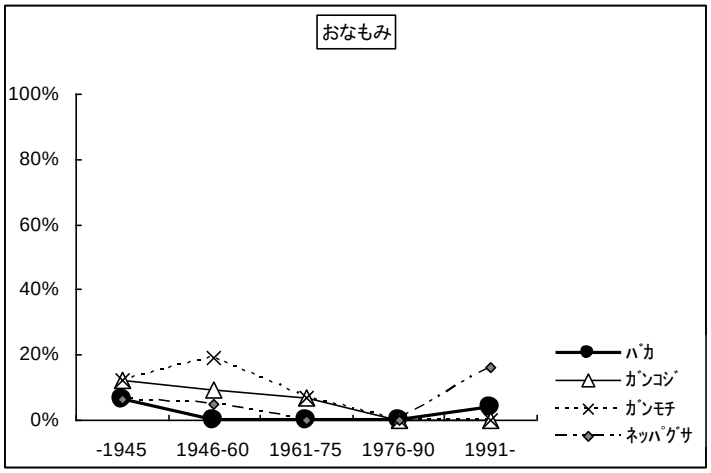


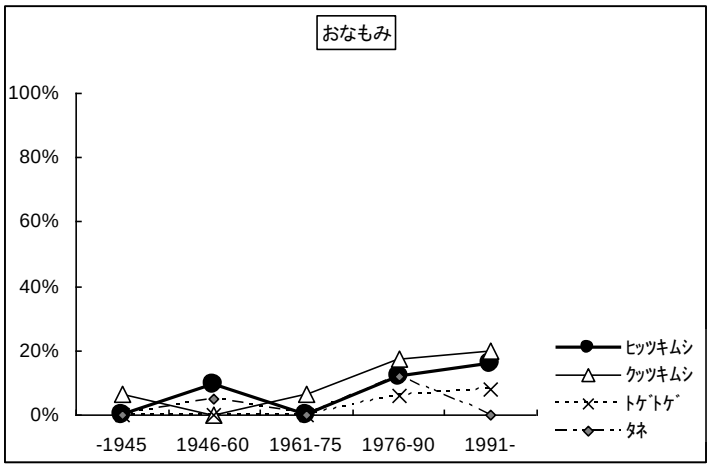
まず，明々後日から見ていきます。方言形のヤナサッテの勢力が強いのですが，1976 年～1990 年生まれ世代では 5 割, 1991 年以降生まれの世代でも未だなお約 3 割の使用が見られます。ヤナサッテの使用率の推移とともに共通語形のシアサッテの使用率の推移についても見てみると，特に 1976 年～1990 年生まれの若い世代においても，約 5 割しか使用が見られません。以上のことから，明々後日の呼称に関して，山木屋における共通語形シアサッテの流入の遅れが指摘できると考えられます。



次に明々後日の翌日についてです。山木屋においてはシアサッテからヤナサッテという変遷を遂げていることがわかります。またシアサッテ以前にはサナサッテという語形が普及していたことが確認できます。1931～1945 年生まれ世代で 4 割，1946～1960 年生生まれ世代で約 3 割，1961 年～1975 年生まれ世代では使用率が 1 割を下回りますが，1976 年～1990 年生まれ世代においても約 2 割の使用が見られます。サアサッテは福島県のほぼ全域で用いられていた語形であり，明々後日の翌日を表す伝統的な方言形であると言えます。山木屋には伝統的な方言形であるサナサッテがいまだに残存していると言えるのではないでしょうか。

103.おなもみ【写真】草むらに入るとこのような草の実が服にくっついてくることがありますが，これはなんと言いますか？

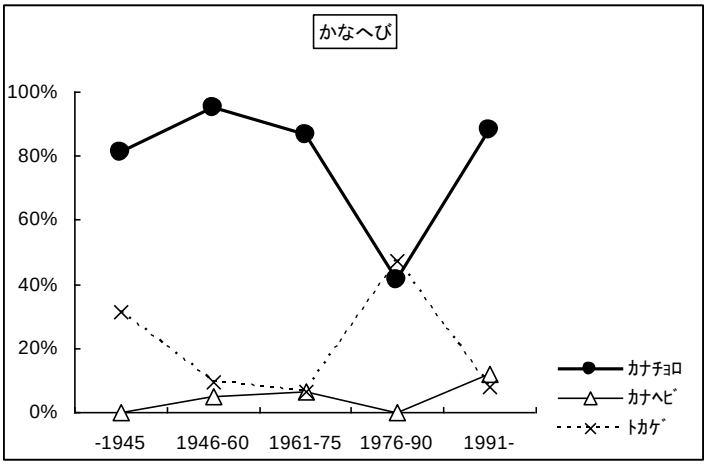




おなもみの呼称については少数意見も含めて数多くの語形が認められました。山木屋では，おなもみに特定の呼び名を充てるという傾向はあまりないようです。1946～1960 年生まれ世代ではガンモチ，1976 年以降生まれ世代ではクッツキムシ，ヒッツキムシがやや優勢です。

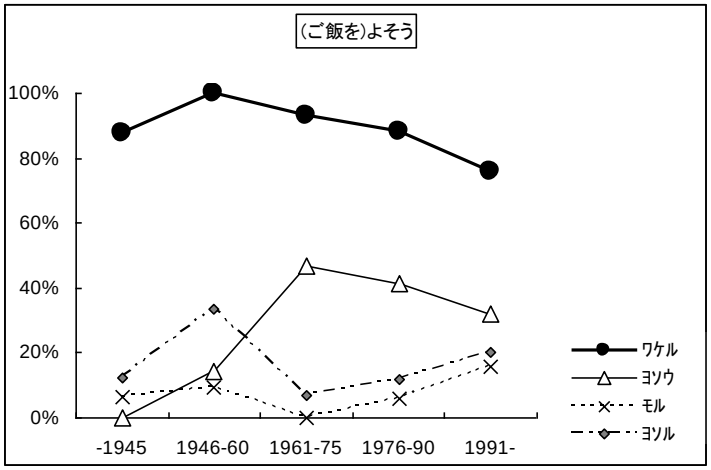
若い世代で優勢であったクッツキムシは，関西や関東で用いられているヒッツキムシやトッツキムシが南から伝わってしてくる過程で，元々の福島県の方言形であるクッツキグサと混ざって，クッツキムシという新しい語形が生まれたとも考えられます。

101.かなへび【写真】草むらや日なたを走ります。少し小さくて土色。水には入りません。これはなんと言いますか？



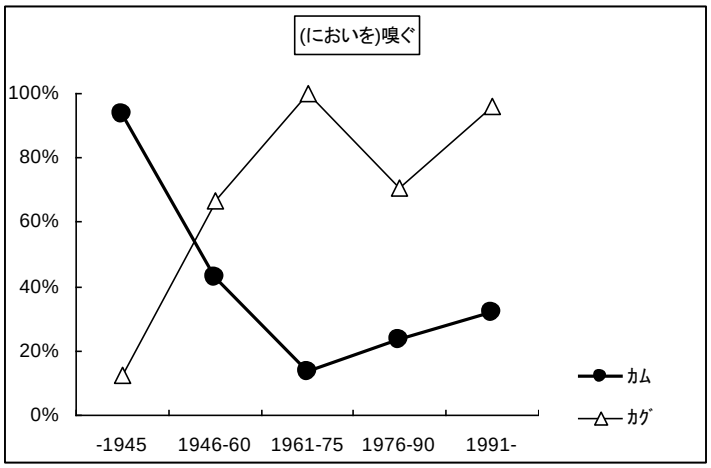
かなへびの呼称としては，カナチョロが優勢です。伊達郡南部ではこのカナチョロという語形が優勢であるようです。この語形はかなへびの「チョロチョロ走る」様から発生したものと想定するならば，かなへびの生態を適切に表した語としてとらえ，未だに衰退せずに残存していると考えられます。

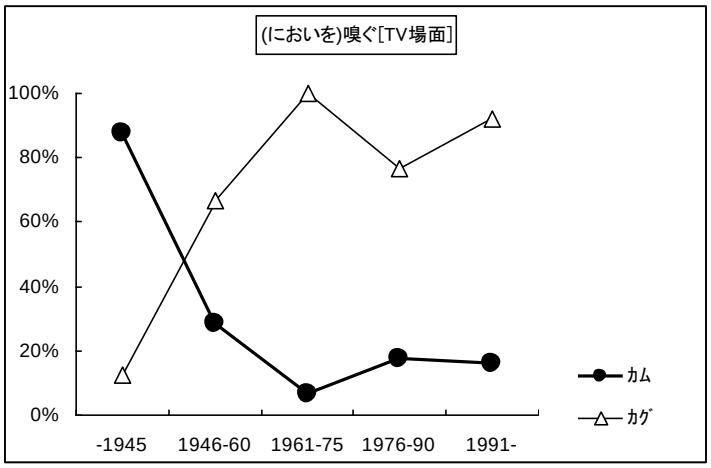
116.よそう　茶碗にご飯をどうすると言いますか？



方言形ワケルの使用率が高くなっています。ワケルは気づかない方言であることが顕著に示された結果です。ワケルの使用は全世代において 8 割以上見られます。一方共通語形のヨソウは，山木屋では約 4 割の使用が確認できます。

117.嗅ぐ【動作】鼻を近づけて花の香りをくんくんどうすると言いますか？もしテレビに出て言うとしたらどうでしょうか？

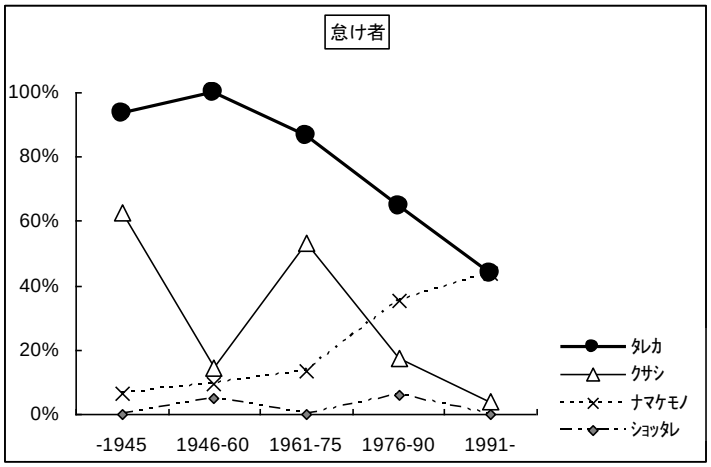




1946～1960 年生生まれ世代を境にしてカムとカグの勢力が逆転しており，共通語化が見て取れます。方言形カムは完全に衰退しておらず，1976 年以降生まれの世代で，再び使用率の上昇が見られるほどです。

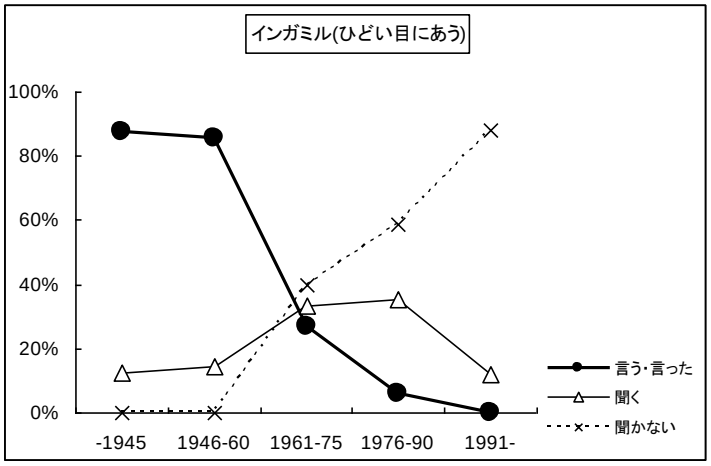
また「TV に出演したらなんと言うか」という質問について見ても，若年層でのカムの使用率が 2 割程度確認されます。

111.怠け者　仕事をしたがらない「怠け者」のことをどう言いますか？



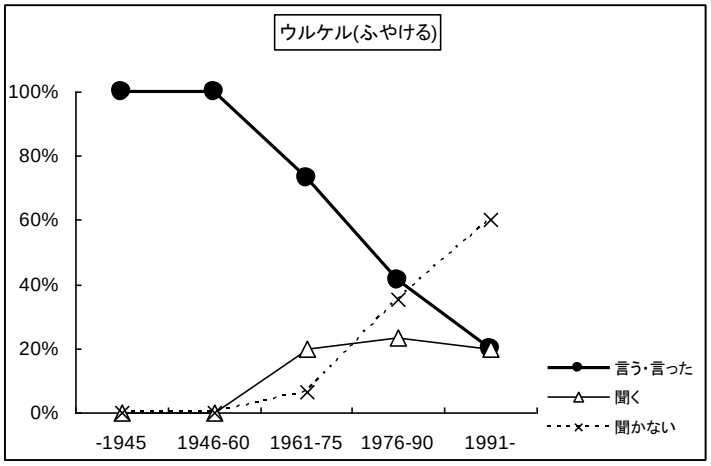
タレカとは「できるのにしなかったり仮病を使ったりして怠けること。おうちゃくすること」の意味の方言形で，宮城県や福島県で用いられています。クサシについては「怠けること。また，怠け者。ものぐさ」の意味の方言形で，福島県で用いられています。両語形ともに衰退しつつある語形です。

123.インガミル 「ひどい目にあった」ということを「インガミル」のように言いますか？



インガミルとは「ひどい目にあう」の意を表す方言形です。1976 年～1990 年生まれの世代で使用が見られなくなりますが，1960 年生まれ世代までは約 8 割の使用が認められ，残存の傾向が伺えます。

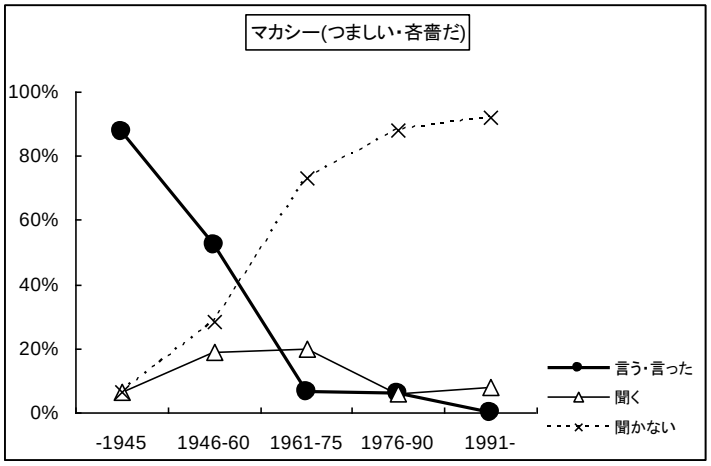
134.ウルケル 長い間お湯に手を浸けておいてしわが寄ることを「ウルケル」と言いますか？

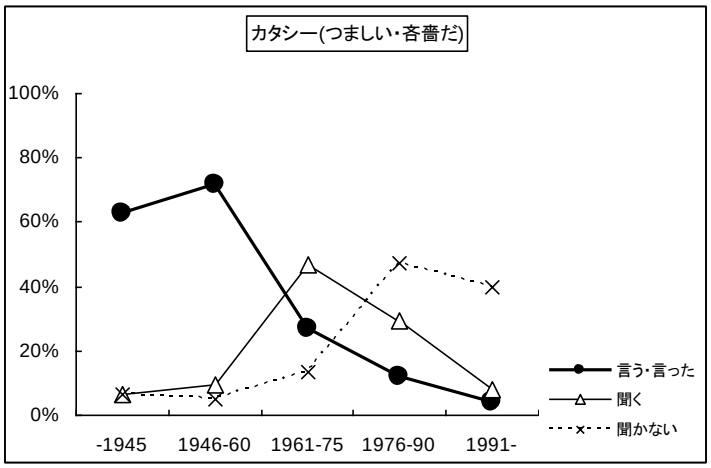


ウルケルとは「ふやける」の意の方言形です。ウルカスと共に，気づかない方言として多用されると想定していましたが，右肩下がりに使用率は低下しており，共通語化が確認されます。

ただし戦後生まれの全ての世代において使用率が高く，1991 年以降生まれの世代でもなお約 2 割の使用が見られ，共通語化が遅れているとみることもできます。

129.マカシー・カタシー あまりお金を使わないことを「マカシー」とか「カタシー」と言いますか？

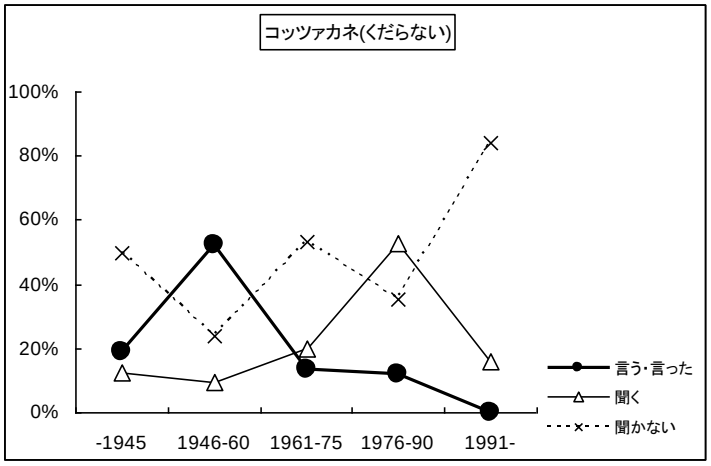


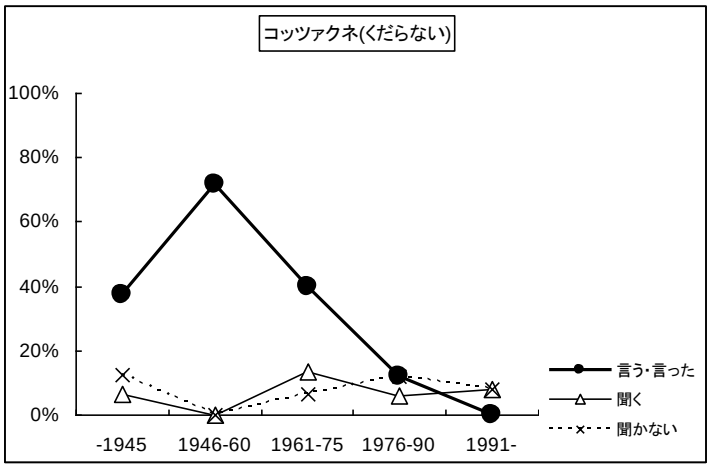


マカシーは「金銭に細かい，吝嗇だ」や「つましい，質素だ」の意味で，東北各地で用いられる方言形だとされています。マカシーもカダシーも，著しい共通語化が確認できます。

カダシーに関しては「『マカシー』は節約したり，物を大切に使ったりするようなプラスイメージの語で，けちと言ったようなマイナスイメージを持つときは『カダシー』を使う」との話を伺いました。「あまりお金を使わないこと」と一口で言っても，節約することなのか，けちをすることなのかと状況は様々なようです。

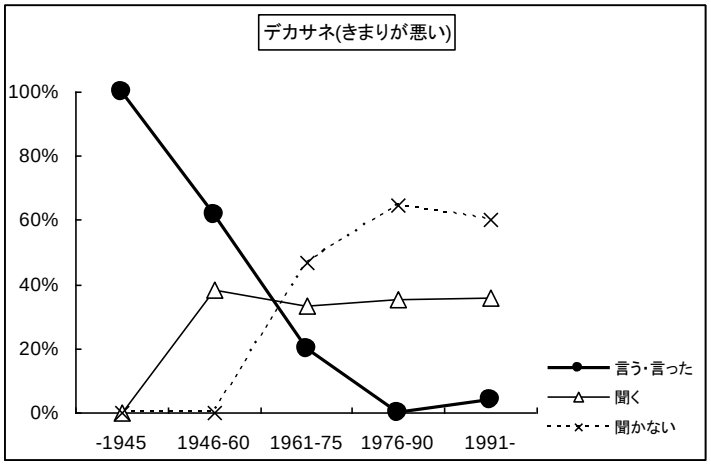
130.コッツァカネ・コッツァクネ くだらないということを「コッツァカネ」とか「コッツァクネ」言いますか？





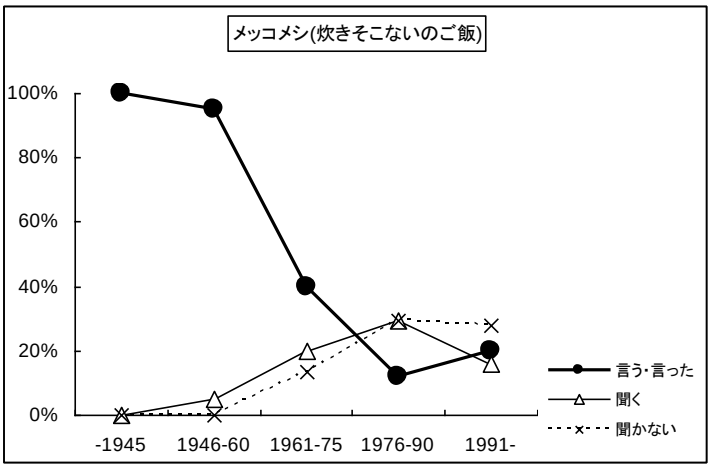
コッツァカネの使用率はどの世代でも 5 割以下となっています。一方，山木屋で使用の多さが見られるコッツァクネについては, 1961 年～1975 年生まれ世代ではおよそ 3 割, 1976 年～1990 年生まれ世代ではおよそ 1 割の使用が確認できます。コッツァクネは山木屋において中年層で勢力を持つ方言なのかもしれません。

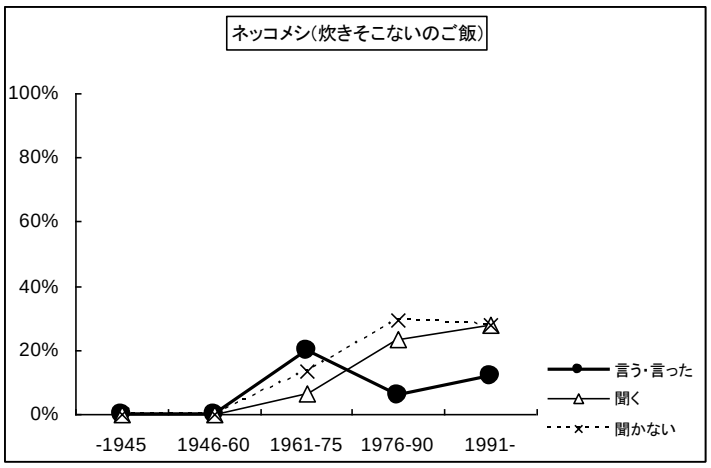
131.デカサネ　見た目や体裁がわるいことを「デカサネ」と言いますか？

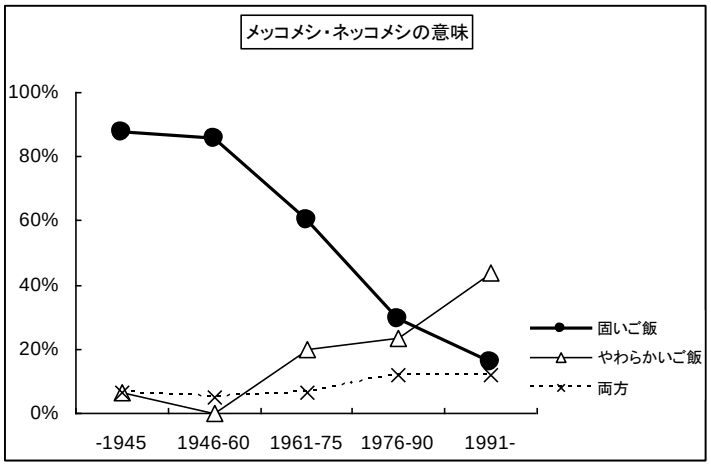


「きまりが悪い，ばつが悪い」という意味のデカサネは共通語化が速いことばです。山木屋では，1931～1945 年生まれ世代でおよそ 9 割の使用が見られるのを最高に世代を経るにつれ右肩下がりで使用率が低下し，1976 年～1990 年生まれ世代でその使用が見られなくなります。

132.メッコメシ・ネッコメシ　上手に炊けていないご飯のことを「メッコメシ」とか「ネッコメシ」と言いますか？



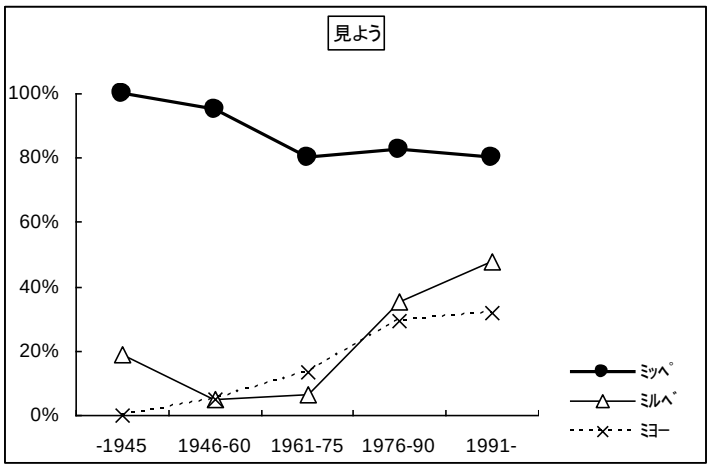


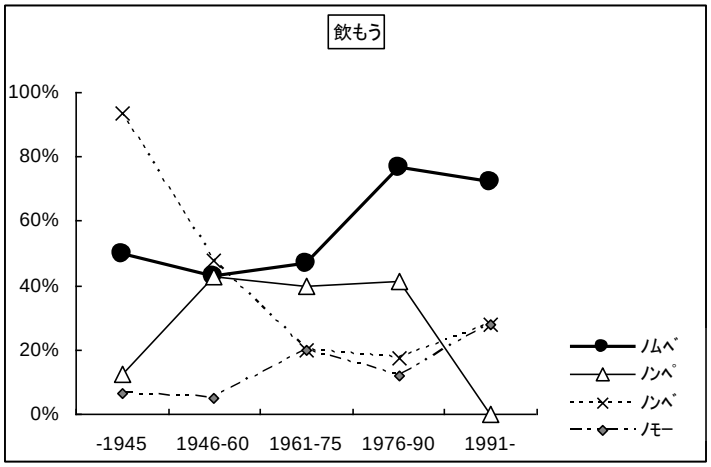


メッコメシとは「炊き損ないの芯のある飯，半煮えの飯」の意味の方言形です。一方ネッコメシは，おそらく芯が残った固さを，木や草の根の固さになぞらえて，後の時代に発生した語形ではないかと考えられます。山木屋ではネッコメシ使用がほとんど見られません。

201.見よう 「一緒にテレビを見ようよ」と誘うときの「見よう」の部分はどう言いますか？

202.飲もう 「一緒にお酒飲もう」と誘うときの「飲もう」の部分はどう言いますか？



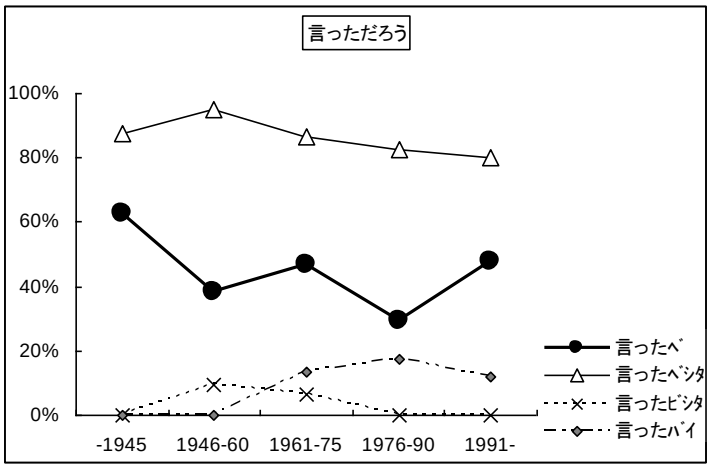


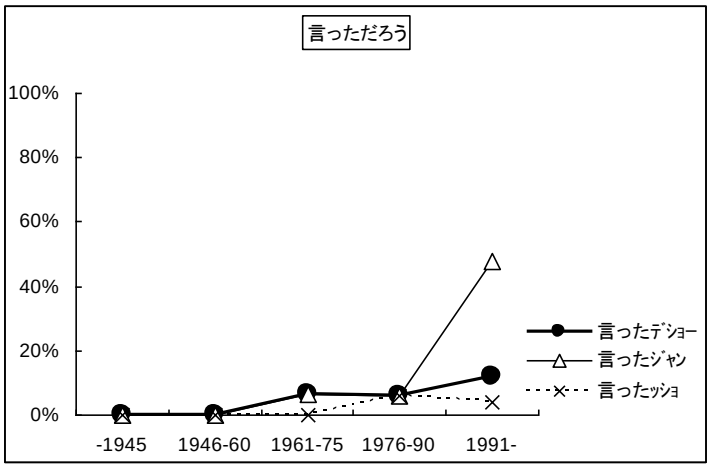
「見よう」「飲もう」という勧誘表現の用法について見ていきます。

「見よう」についてはミッペの勢力が強く，全世代で 8 割以上の使用が確認できます。しかし，図が示すとおり，若年層ではミルベの使用が急激に増加してきています。ミルベは共通語「見る」に直接ベを接続させた形であり，ミッペに比べると方言的な要素が薄い語形であると言えます。日常の使用言語が共通語化してきている若年層において，ミッペからミルベの変化が起こったのではないでしょうか。

次に「飲もう」についてですが，ノンベからノンペ，そしてノムベという語形の変遷が見られます。ノンベが古形でノムベは新形だと言うことができ，世代差の変化でもそれを確認できます。これらのことから「見よう」，「飲もう」いずれにおいても，若年層以下の世代では共通語の「見る」「飲む」に直接ベを接続させた「ミルベ」「ノムベ」の使用が多くなってきているものの，古形である「ミッペ」や「ノンペ」も完全に衰退することなく使用され続けていることが分かりました。

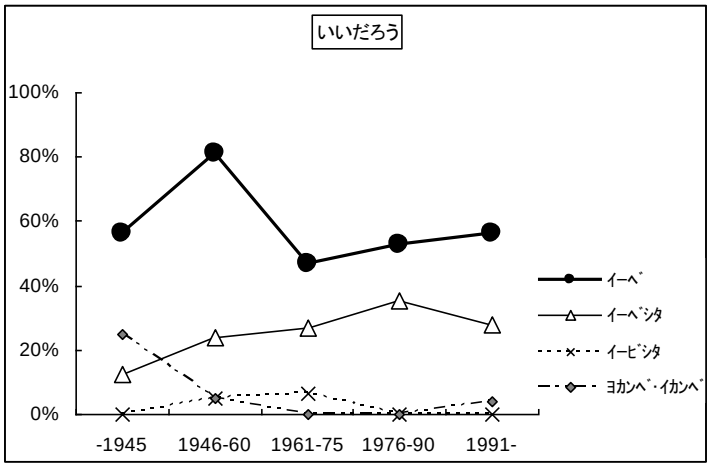
203.言っただろう 相手が忘れているのを思い出させようとして「あなた昨日そう言ったじゃないですか・言ったでしょう」と言うときの「言ったでしょう」の部分はどう言いますか？





(言った)ベシタの使用が多く，全世代で 8 割以上の使用が確認できますが，松川町などで確認される(言った)ビシタの使用は山木屋ではほとんど確認できません。

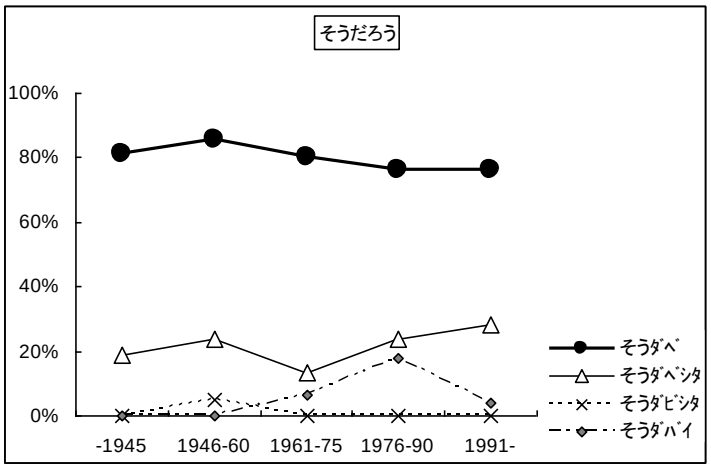
206.いいだろう 「この辺でもういいだろう」と言うときの「いいだろう」の部分はどう言いますか？

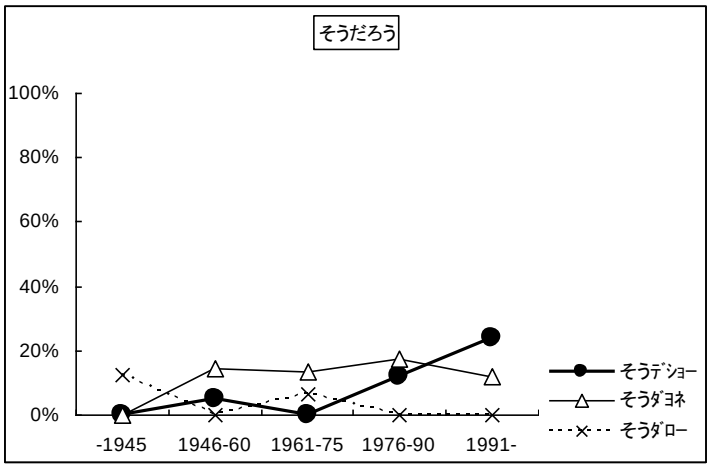


「いいだろう」は大変多くの語形が回答として得られたので代表的な語形のみを提示することにします。

山木屋ではイーベが優勢です。イーベシタの使用がイーベに続いて多く見られますが，他にも少数語形として「イーベン」「イーバイ」「イカンベ」「ヨカンベ」「イカッパイ」等，様々なものが挙がりました。また「いいだろう」においては若い世代でも「イーベ」の勢力が強く，共通語的な「イーンジャナイ」や「イージャン」は，あまり確認できない結果となりました。

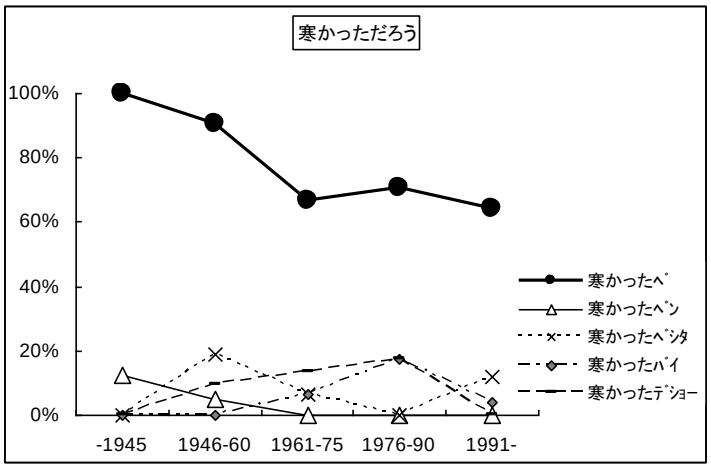
205.そうだろう 「(家族・親しい人に同意を求めるように)そうでしょう」と言うときの「そうでしょう」の部分はどう言いますか？





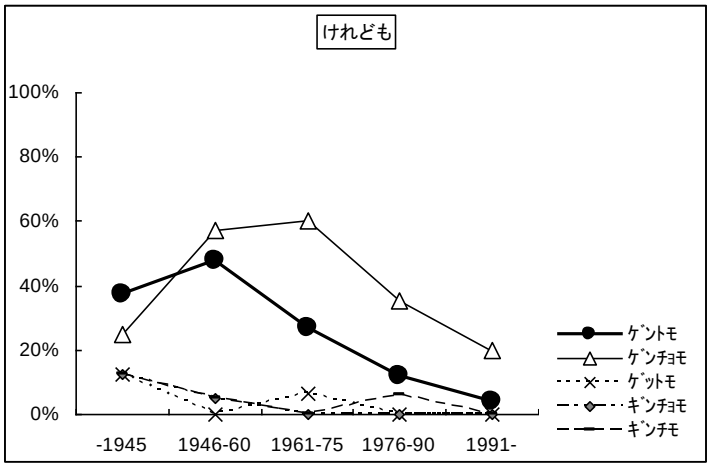
(そう)ダベが多用されています。「いいだろう」や「言っただろう」ではダベシタやダビシタの使用も目立っていましたが，ここでは山木屋でダベシタの使用が 4 割弱，にとどまっています。

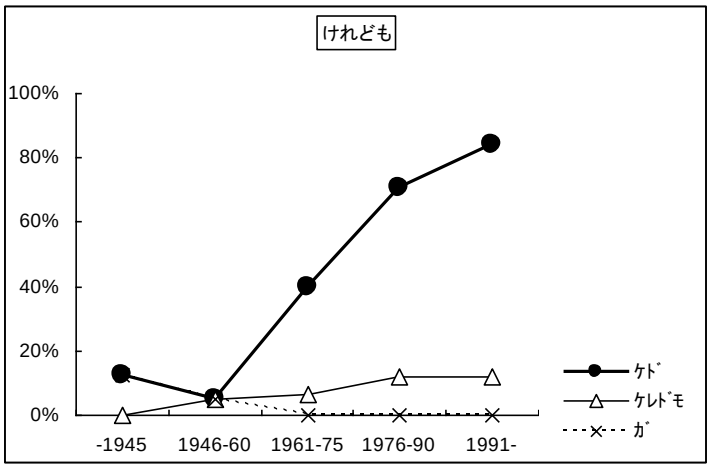
204.寒かっただろう　冬，外から帰ってきた家族に「外はさぞ寒かったでしょう」と聞くときの「寒かったでしょう」の部分はどう言いますか？



前項の「そうだろう」と同じように「寒かっただろう」においても(寒かった)ベの使用が盛んです。若い世代でも 7 割程度の使用が見られ，急激な衰退の様子はうかがえません。一方，ベシタはほとんど使用が確認されていませんが，世代が下がるにつれてその使用が若干増加していることが分かります。

207.けれども　友達に「行くけれども遅れる」と言うときの「けれども」の部分はどう言いますか？

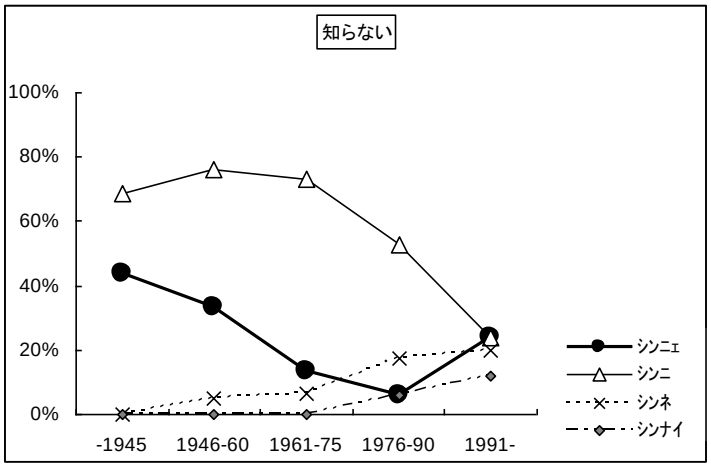


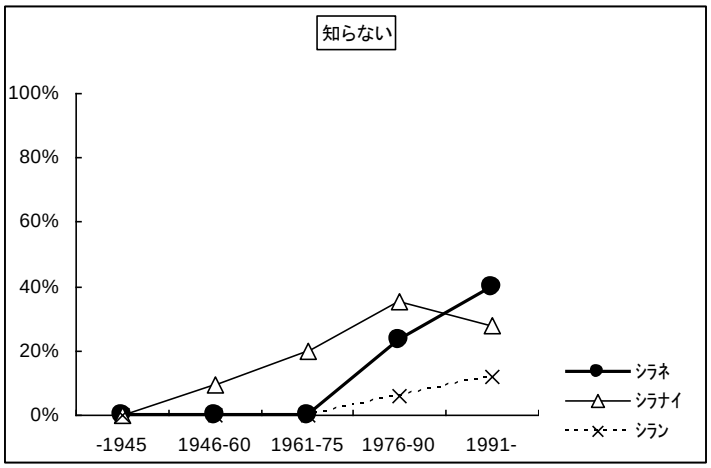


福島県北部では共通語の「けれども」に対応する語形として，ケンドモ，ケントモ，ケンチョモ，ケンジョモ等，様々見られます。山木屋でも多数語形の回答を得ました。ここでは，使用の多かったゲントモとゲンチョモについて考察をしていきます。

1970 年代に行われた先人の研究では，伊達郡保原町と福島市茂庭地区ともに，高年層ではケンチョモ，若年層ではケントモの使用が多く見られるとの指摘があります。一方山木屋では中年層における使用の多さが目立ちます。ゲンチョモという語形の山木屋への侵入が遅れたことを意味しているととらえられると考えられます。

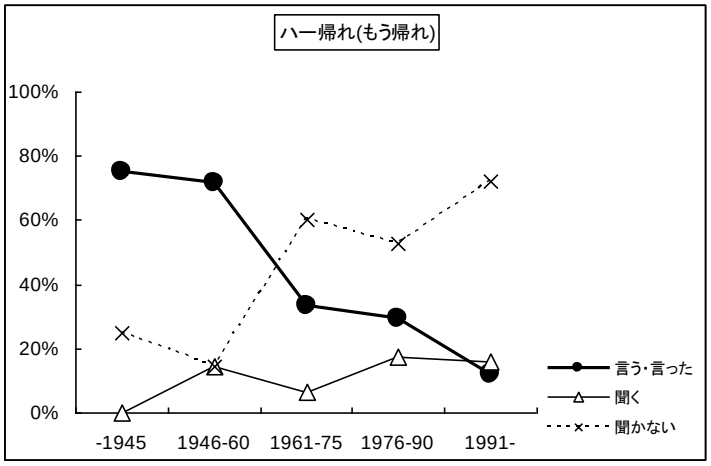
210.知らない 「私はその話は知らない」と言うときの「知らない」の部分はどう言いますか？

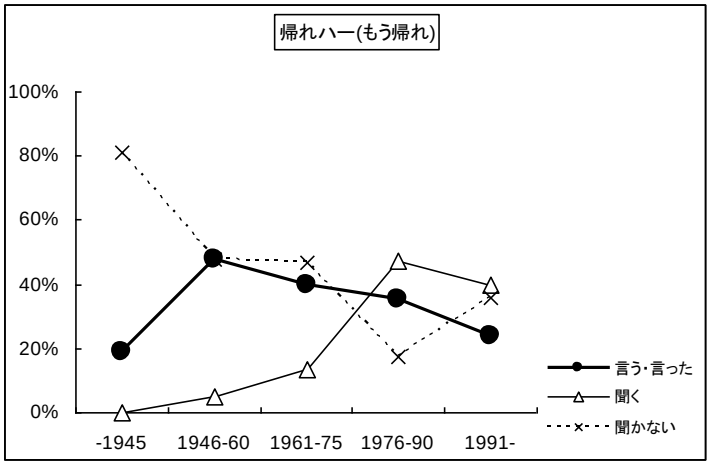




多数の語形の回答が得られましたが，ほとんどの世代でシンニの使用が最も多いという結果になりました。またシンニェは主に高年層に使用されていることから，シンニェからシンニへの変化が起きたということが推測できます。1976 年以降生まれの若い世代を中心にシラネという，より共通語に近い形のことばの使用も多く見られています。

223.ハー 親しい人に「もう帰れ」と言うときに「帰れハー」とか「ハー帰れ」とは言いませんか？

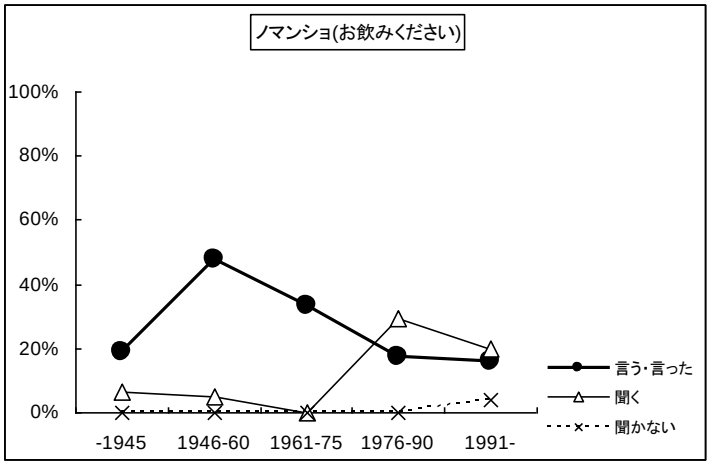




ハーは「語句の一区切りの所，もしくは文末について軽く感情を表す」語です。「ハー帰れ」と「帰れハー」という 2 通りの用法（ハーが「帰れ」の前後どちらへ接続するかが見られます。「ハー帰れ」の衰退が速く，「帰れハー」については大きな衰退は見られません。むしろ 1976 年以降生まれの若い世代でも 3 割ほどの使用が見られます。

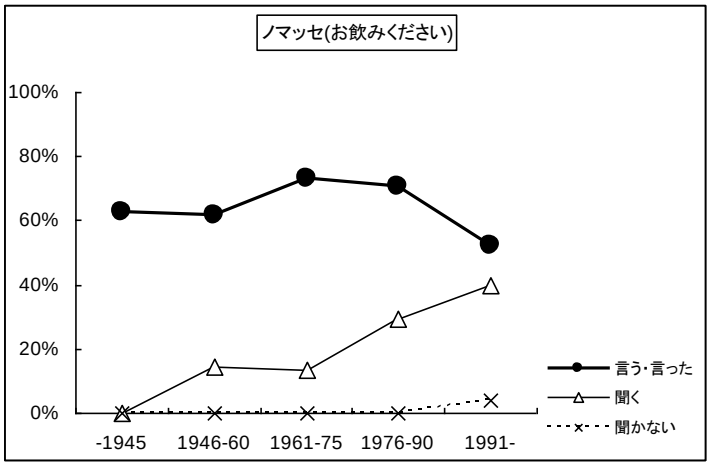
「ハー帰れ」は，高年層での使用が多く確認できることから，「帰れハー」よりも古い語形だと推察できます。

233.ノマサンショ･ノマンショ･ノマッセ 「どうぞお飲みください」ということを「ノマサンショ･ノマンショ･ノマッセ」と言いますか？



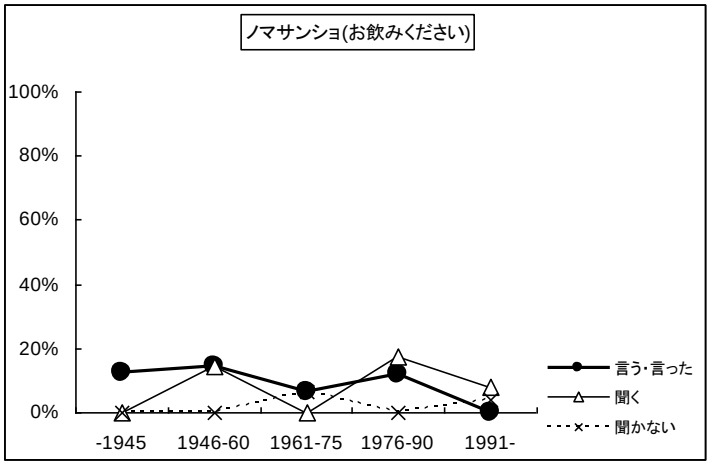
来客等にお茶を勧める場合の敬語表現について見ていきます。

ノマンショということばを「言う」と回答した割合は全世代で 2 割から 5 割程度，確認できますが，全体的に見てそれほど多くの使用が見られるわけではないようです。「聞くことはある」という回答も若い世代で 3 割ほど見られるのみとなっています。



ノマッセは前に述べたノマンショとは違い，全世代でほぼ 7 割程度の使用が見られます。「聞くことはある」という回答も世代が下がるにつれて右肩上がりに上昇していることが分かります。

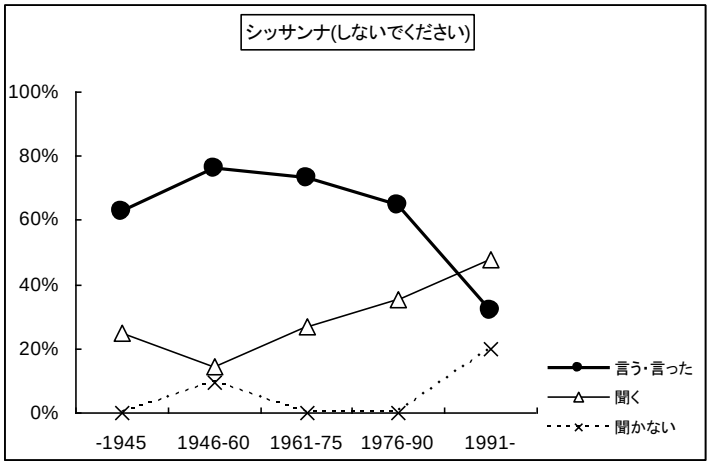
233.ノマサンショ･ノマンショ･ノマッセ 「どうぞお飲みください」ということを「ノマサンショ･ノマンショ･ノマッセ」と言いますか？

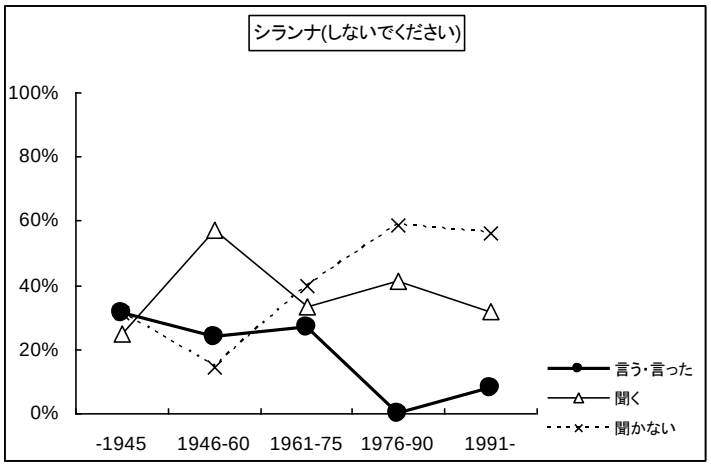


ノマサンショはほとんど使用が見られず，また「聞くことはある」という回答も非常に少ない語形です。

234.シッサンナ 「無理をするな」ということを「無理シッサンナ」とは言いませんか？

235.シランナ では「無理シランナ」ではいかがですか？





1991 年以降生まれの世代を除けば 6 割から 7 割の使用が見られます。「聞くことはある」の回答も増加していることから，シッサンナという語形は生活の中でいまだに用いられている語形であると言えるのではないでしょうか。

シランナについて見てみると，シッサンナに比べてその使用がとても少ないことが分かりました。また「聞いたことがない」という回答が，下の世代になるにつれて増加してきています。シランナは山木屋においてはあまり広まっていない語形だと言えるでしょう。

あとがき

山木屋の方言について調べたいと思ったきっかけは，2007 年度から 2009 年度まで勤務した山木屋中学校での 3 年間にあります。初めにも述べましたが，山木屋には私が初めて耳にするような方言がたくさんあったり，中学生でも当たり前のように方言を多く使って会話をしていたりするという現状を目の当たりにして，私は山木屋のことばに深く興味を抱きました。

山木屋地区の皆さんは非常に親切で住民の皆さん同士の一体感があり，学校の教員に対しても古くからの知り合いであるかのようにとても親しく接してくださいました。私が「方言に興味がある」と話せば，様々な方言を教えてくださったり，地域住民の方々が有志で編集した方言集を見せてくださったりしました。特に，川俣町役場山木屋出張所所長である広野孝光さんと社会教育主事の吉村弘子さん，山木屋公民館長の廣野隆俊さんと同副館長の菅野典保さんには，調査協力者の選出や集計，調査会場の提供をはじめ，調査に関わる全ての面で多大なるご支援をいただきました。心より深く感謝申し上げます。また，山木屋地区自治会長の大内秀一さんや各行政区長の皆さんは，区からの調査協力者の選出のみならずご自身もイ調査に協力してくださる等，多くのご協力をいただき，感謝の念に堪えません。今回の調査をきっかけに友人づきあいをさせてもらうことになった協力者の方もいたり，教え子の中学生や高校生も快く調査を引き受けてくれてくれたりと，この研究を進めていくにつれて，山木屋の人々の心の温かさと親切心を再確認できました。

しかし，2011 年 3 月 11 日の東日本大震災による原発事故で山木屋地区は計画的避難区域に指定されてしまいました。山木屋地区の皆さんは避難を余儀なくされ，現在は地域住民が皆離ればなれになって生活しています。緑豊かで自然あふれる山木屋も，今はもうひっそり閑として寂しい状態になっているのでしょう。私にとっての山木屋は，教員として大きく成長させてくれた場所で，第二の故郷であるといっても過言ではありません。大好きな山木屋が，山木屋に住む皆さんがこのような惨状に身を置くことになってしまったことに，私は日々，胸がつぶれる思いを感じています。今後，お世話になった山木屋には何らかの形で復興支援に携わっていきたいものです。その復興支援の一端として，この研究が，本来の山木屋地区のことばの実態を記すものとして，山木屋の皆さんのアイデンティティーのよりどころになれたら，非常に光栄に思います。

またいつか，あの山木屋で皆さんとお会いし，いろいろな思い出話に花を咲かせることができる日が来ることを願いつつ，地区の皆さんの健康とご多幸をお祈りし，あとがきに代えさせていただきます。このたびは「山木屋のことば」の研究に際して本当にお世話になりました。ありがとうございました。

2013 年 3 月

元　山木屋中学校教諭
菅野(旧姓 遠藤)理恵

2012 年度　文化庁委託事業
東日本大震災において危機的状況が危惧される
方言の実態に関する調査研究事業(福島県)

山木屋のことば

著:菅野理恵 / 監修:半沢　康

〒960-1296　福島市金谷川 1
福島大学人文学類
Tel　024-548-8124
Fax　024-548-8124
e-mail　yhanzawa@educ.fukushima-u.ac.jp

印刷　2013 年 3 月 20 日
発行　2013 年 3 月 20 日